

## はじめに

医療の進歩は、目まぐるしいほどに急激であるにもかかわらず、今、日本では二人に一人がんに罹り、三人に一人ががんで亡くなるという時代となっています。がん治療の進歩だけが鈍いということではなく、高齢化社会で、また他の疾患では亡くなる方が少なくなってきたのも一因であると思われます。

最近のがん化学療法の進歩は著しく、抗がん剤に分子標的治療薬が加わり、内服の分子標的治療薬だけで治癒する例や、あるいは抗がん剤と分子標的治療薬との併用で生存期間の大幅な延長もみられるようになりました。

一方、分子標的治療薬の出現によって、がん化学療法の副作用対策は多岐にわたるようになりました。多くの分子標的治療薬は、がん細胞だけを攻撃し、骨髄抑制はないものと考えられたのが、実は、高血圧、蛋白尿、発疹、浮腫などこれまでの抗がん剤にはなかった思わぬ副作用がみられたのです。また、最近のがん化学療法は、エビデンスとしても明らかに有効であり、従って、患者さんがこれらの多岐にわたる副作用を克服できるように支援し、あるいは予防対策で、より軽微な副作用で済むようにすることにより、治療を完遂させることは大切なことなのです。

がん化学療法が、全ての患者さんに効いてくれることを願いますが、もし不幸にして効かなかった場合でも、しっかり治療ができた患者さんが納得できることが大事であると思います。

ぜひこの本を活用し、沢山の患者さんが、副作用少なく、治療効果が上がってくれることを願います。

2010年9月

佐々木常雄